

1月下旬に、臼澤良一さんと山口幸夫さんがベルリンを訪問しました。臼澤さんはNPO法人遠野まごころネット副理事長で、山口さんは日本社会事業大学にある社会事業研究所の特任准教授です。山口さんの専門は災害復興と移住者支援です。彼らは1月24日から29日まで私たちの家に泊まりました。訪問の目的は2つありました。一つは、絆・ベルリンとの交流でした。特に、ドロノキ・プロジェクトについて情報交換し、今年の翼・プロジェクトの準備をしました。もう一つは、いろいろなNPOや社会施設の訪問です。スケジュールが本当につまっていました。

1月24日（金曜日）に、彼らはベルリンに着きました。「絆・ベルリン」の福澤さんがテゲル空港から彼らをピックアップしました。私の家で、まずビールで歓迎の乾杯をしました。その前日妻は凍結したテラスでスリップして、右腕を折ってしまいましたので、私が夕食を作りました。メインディッシュは Köni gsberger Klopse（ケーニヒスベルガー クロプセ）というベルリンの郷土料理でした。ミートボールとケッパーが入った、ちょっと酸味のある白いソースです。



1月25日（土曜日）

この日はひどい寒波が来ました。日中の最高気温は零下12度でした。本当に寒かったですが、妻と私はお客様を8時間ベルリン案内しました。

午前中、ベルリン・クロイツベルクを散歩しました。クロイツベルクは多文化地区です。ここに住んでいる人の20%以上が在留外国人です。

トルコ人、クルド人、アラブ人など、外国人労働者とその家族が多く居住している地域でありまして、経済的に貧しく、社会的弱者の人たちが大半です。

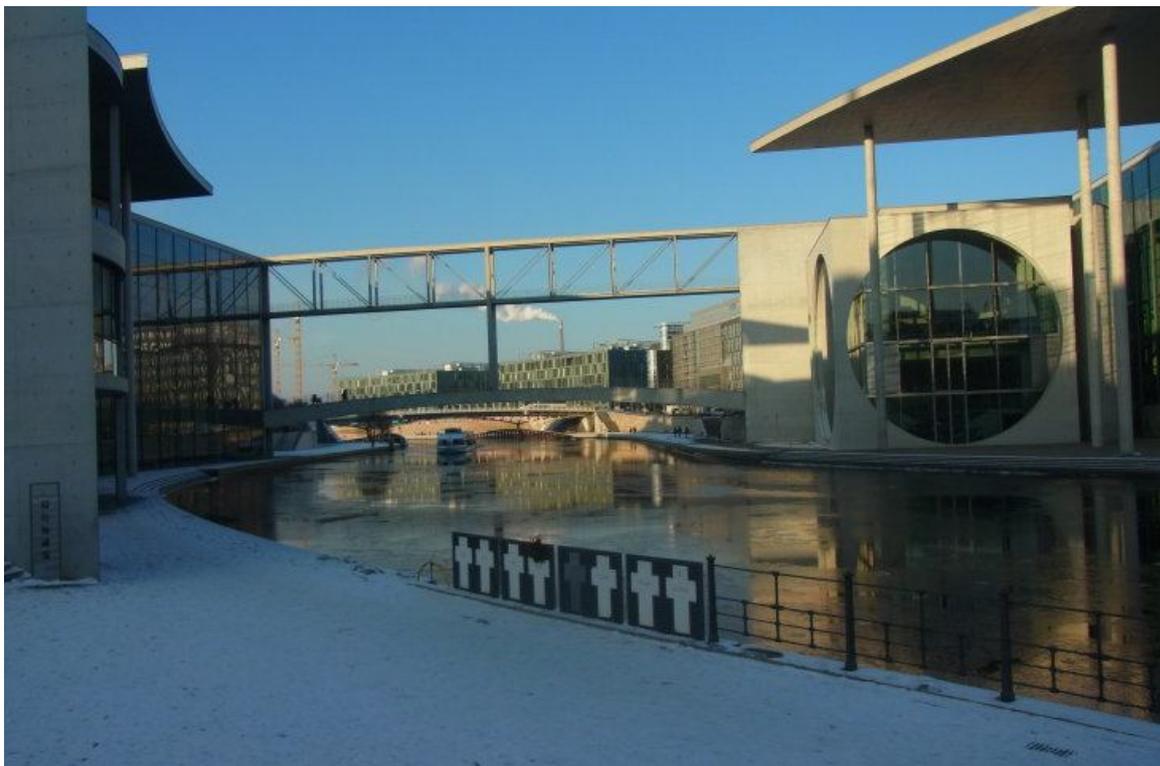
クロイツベルクの散歩に引き続いて いろいろな名所を案内しました。

チェックポイント・チャーリーからジャンダルメンマルクト、ブランデンブルク門を経て、国会議事堂まで歩いて行きました。

午後、空はとても青かったです。シュプレー川で砕氷船も見えました。

最後、ホロコースト記念碑を見に行きました。

ベルリン都心を散歩すると、ドイツの歴史についての概観がわかると思います。



晩に、歓迎会が私のところで開かれました。「絆・ベルリン」と「友の会」のメンバーが20人参加しました。皆さんが飲食物を持って来ました。もちろん、みんな上機嫌でした。

皆さんの自己紹介の後、臼澤さんと山口さんが被災地の現状について報告しました。特に、大槌の現状について話してくれました。再興と護岸に随伴する懸案の諸問題

についてです。大槌は代表的な例です。何よりも、高い防潮堤が活発な討論の対象となっているようです。未来の津波被害を予防するために、国は高さ14.5メートルの防潮堤を建てる予定です。

しかし、たくさんの地域住民がその計画に疑問を持っています。特に、漁師で生活する人々は徹底的に反対しています。そして、たくさんの地域住民は「日本の海岸の美しさを宝物のように大切にしたい」と言っています。多くの地域で問題になっているのがわかります。巨大な防潮堤による防災と自然と調和した居住環境の快適性が、矛盾しているのです。問題解決の手がかりを見いだすことは、本当に難しいです。



そして、臼澤さんはドロノキ・プロジェクトについて話してくれました。

去年、伝承館の近くの畑に約3700本の苗木を育てました。

今年、4月26日にドロノキ苗木畑から苗木を掘り出し、4月27日に苗木を植林することが予定されています。

絆・ベルリンはその植林に参加することを決めました。



1月26日 (日曜日)

この日は2回目の市内史跡観光をしました。まだとても寒い日でした。まずは、福澤さんと山田頼子さんの案内でベルリンの壁記念館(Gedenkstätte Berliner Mauer)を観光しました。そして、Nikolai viertel (ニコライ地区) や Neue Wache (新衛兵所)、ベーベル広場の地下図書館(焚書記念碑)、フンボルト大学を見に行きました。

午後、我々は我が家で「翼・プロジェクト」について話し合いました。絆・ベルリンと「遠野まごころネット」はプロジェクトの続行決めました。今年の夏に、「絆・ベルリン」は岩手県から5人の高校生をベルリンに招待します。被災地を離れて、ドイツ社会を体験し、同世代のドイツ人若者と1週間過ごし、異文化経験をすることによって、将来の地域復興・活性化に役立たせてほしいと願うからです。「遠野まごころネット」が岩手県で募集をします。

1月27日 (月曜日)

今日はぎっしり詰まった日程でした。14時以降、「絆・ベルリン」の小林亜未さんが一日中通訳をしました。

* 11時に、山口さんはアリスザロモン大学 (Alice Salomon University, ASU) に行きました。学長の Dr. Theda Borde 先生を表敬訪問しました。山口さんは ASU と彼の日本社会事業大学との国際交流について、さらに ASU の移民支援のソーシャルワーク教育の現状について話し合うことを目的としてベルリンに来ました。

* 同じ時に我が家で、臼澤さん、福澤さん、私は独日青少年協会 (DJJG) の Gesa Neuert さんと会合を持ちました。

2012年の秋に、独日青少年協会はとちぎ日独協会、岩手県、岩手県立大学と協力して、三陸復興をテーマにした日独サマースクールを催しました。Neuert さんは2014年に予定されている第2回三陸復興日独サマースクールのことについて話し合うためにわざわざ Bielefeld から来ました。Neuert さんは大槌でもワークキャンプを予定しているので、臼澤さんと会えたのは、いい機会でした。

* 14時に、「DIM (Die Imaginäre Manufaktur)」障害者のための工場を1時間半見学しました。

今日見物した工場は100年前から盲人のための授産施設としてブラシ製造を行ってきました。革靴が高価で一生物だった時代、多くの靴磨き用ブラシが必要とされていました。しかし、盲人施設の商品は時流とはだんだん相いれなくなりました。

1998年以来、盲人施設はデザインスタジオと共同して新製品をたくさん開発してきました。その人目を引く新製品はDIMという商号で販売されています。

それ以来、旧盲人施設の所在地では、手作りのブラシ、千代紙和紙の箱、籐製品、陶器等の工芸品製作販売や籐いす等の修復を行っています。それは主として伝統的な職人芸です。DIMは50人以上の障害者の工員をかかえています。身体障害者も精神障害者もいます。

2005年にDIMはUSE会社組織になりました。「USE (Union Sozialer Einrichtungen)」は350人の従業員と約750人の障害者(主に精神障害者)のパートナーを持つ社会企業EUと共同福祉協会の基金によって運営されています。

ちなみに、別の所で子どものためのふれあい動物園を運営しています。そして、結婚式のためのケータリングサービス、ブライダルブーケやお祝いのビュッフェを提供しています。

工場の経営者が案内してくれました。まず、彼は概略を示しました。そして、いろいろな工作室を見せてくれました。



たとえば、製本所や籠細工、ブラシ製造所を見学しました。その製本所では日本の紙を加工しています。



DIM 会社訪問の目的は被災地に有益な情報を得ることです。今年、大槌で「一つ屋根の下」の名で、集会場兼木工工房などが建てられます。そこに障害者のための工場も建てられています。建築主は「遠野まごころネット」です。

「絆・ベルリン」はあの上長部と同じようにこのプロジェクトを仲介しています。ドイツのボッシュ財団が早くも200.000ユーロを寄付してくれました。

臼澤良一さんは見学の後「我々は有益な示唆を得ました」と言いました。交流を続けていきたいと言っていました。近い将来に日本とドイツの工場が互いに助け合うようになるかもしれません。

* 16時に、NPO「Kotti」の「Familiengarten（日本語で「家族の庭」、トルコで「Aile Bahçesi」）」を訪問しました。NPO「Kotti」は異文化間町内会です。「Kotti」は「Kottbuser Tor」と呼ばれる広場の略名です。「Kottbuser Tor」は「家族の庭」の近くにある広場と地下鉄駅です。クロイツベルクの中央です。

ソーシャルワーカーの Neriman Kurt(ネリマン・クルト)さんが多文化地区の現状について報告しました。

クルトさんは30年以上、クロイツベルクに住んでいます。そして、20年以上、彼女はソーシャルワーカーとして、移民家族支援をこの地区で行って来ました。特に、Kurtさんはトルコ人とクルド人の現状を教えてくださいました。そして、すべての質問に対して正確に答えてくれました。2時間以上付き合ってくださいました。



向かって右から3番目の人がネリマン・クルトさんです

> クロイツベルグの戦後状況と人口動態

1945年にドイツ分割がありました。冷戦の最中に、1961年にベルリンの壁が建てられました。西ベルリンは飛び地になりました。クロイツベルグは都心区から壁に沿った周縁地帯になってしまいました。

暮らしにくい時だったので、ベルリンの企業および人口が減少してしまいました。西ドイツの労働力の不足を克服するために、連邦政府は外国人労働者を募集し始めました。そして、西ベルリン政府は西ドイツから労働者を誘引するために、西ベルリンで定職に就く人々に税制上の特典を与えました。

また、西ベルリンに雇用を増やすため企業に安い税金などのインセンティブを与え、多くの企業を誘致しました。しかし、生産現場に技能職が足りなくなりました。

1950年代からイタリア、スペイン、ユーゴから労働者が移住して来ました。それでも足りなくて1960年代からトルコ系労働者を入れました。

西ベルリンで彼らは、単身で来て企業の宿舎に住みながらジーメンスやボッシュなどの大企業の生産現場で働きました。その時代に西ドイツは「Wirtschaftswunder（経済の奇跡）」を謳歌しました。

1950年代と1960年代に、外国人労働者は労働者寮に住んでいました。しかし、1960の後半から家族を呼び寄せはじめました。

クロイツベルグでは19世紀の中ごろに建てられた貸家（Mietskasernen）がありました。設備はとても簡易で、ベルリン中心市街地で一番安いアパートでした。古い家なので、トイレが外にあって、暖房は石炭ストーブしかありませんでした。それでも、移民はたくさんその安いアパートで暮らしはじめました。



クロイツベルグ: 19世紀の中ごろに建てられた貸家

しかし、1960年代の前半に、いくつかの住宅地区は西ベルリンの政府によって再開発区域と決まりました。新しい団地と高速道路を建てるために、古い家を取り壊すことになりました。原理は「面的再開発」でした。ベルリンでは10年以内に4万アパート（約1000戸の古い建物）を取り壊すことが決まりました。クロイツベルグでは7000アパート（約250戸の建物）の取り壊しが決まりました。クロイツベルグの再開発区域の中央は「Kottbuser Tor」でした。そこで、1969年から1974年まで、2000戸のアパートは取り払われて、「NKZ（新しいクロイツベルグ・センター）」と呼ばれるとても不細工な建物群が建てられました。



1974年に落成したNKZ（右）が町並み保存地区（左）の外観を損ねています。

社会の緊張をひき起こしました。再開発後の家賃の高騰や建築された住宅の単調性が批判されていました。さらに再開発地区とその近隣社会との断絶などのコミュニティの破壊などがほどなく顕在化してきました。それで、この地域に住む4万人近いトルコ系移民はやむを得ず住むための戦いを始めました。

同じとき、外国人労働者だけでなく、ドイツ人の青少年もたくさん西ベルリンに入りました。ベルリンでは兵役免除の特権があったからです。それで、たくさんの若者が兵役を逃れるために西ベルリンに入ってきました。その若者たちがクロイツベルグに集って、空き家を不法占拠しました。

ドイツ統一までに、オルタナティブ・カルチャー（Alternative Kultur）と家屋の不法占拠者・シーン（Hausbesetzer Szene）が数多く見られました。

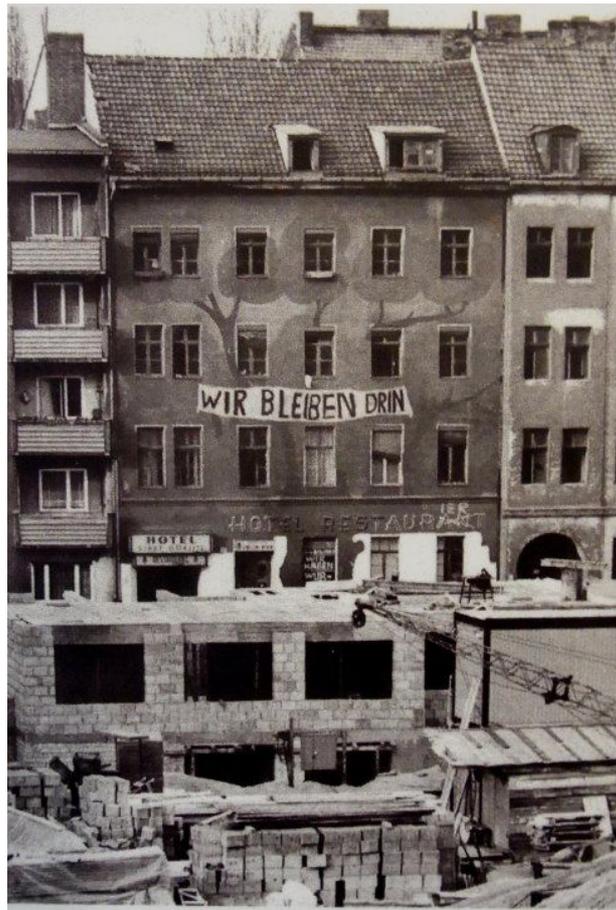
若者たちは自分たちの住まいとコミュニティを守るため戦いを多年にわたって繰り広げました。

1981年に、165戸の貸し家を占拠しました。そして、居住者が占拠者と一緒にデモを沢山しました。

政府も当初は機動隊による暴力で住民を排除しようとした。でも彼らは70年代から25年間、地上げ追い立てや家賃値上げに対抗して、居住のために戦い続けたのです。

最後は、アパートから出て行かなくて、非法占拠を続けることによってベルリン当局に再開発計画の見直しを認めさせたのです。古い共同住宅が再開発されて、アパートを安く貸しています。

面的再開発に対して頑強に抵抗した成果が得られました。



1981年～1984年に不法占拠した家
「Wir bleiben drin = 我々はこちらに居続ける」
常に明確なメッセージでした。

1984年に、50パーセントの占拠した建物が合法化されていました。占拠者は家の所有者か市の行政と賃貸契約書を取り交わし、占拠・自助努力で家を直しました。

運動が政治に威力を発揮しました。西ドイツにおける都市再開発は、この間再開発の理念に著しい変化が見られるようになりました。歴史的建造物や環境の価値に対する見直しの機運が登場してきたのもこの頃でありました。

新しい構想が生まれました。内容は、建物の保存、修理、近代化措置（機能の更新）など個々の建物を対象として都市像の保全、住宅ストックの質的改善等に重点を置く「慎重な、保存的都市更新」の考え方でありました。

しかし、ドイツ再統一後、ベルリンは首都になりましたが、移転してしまった大企業の生産拠点はあまり戻って来ていません。

それで、クロイツベルクの移民の失業率は70%を越えています（この地区全人民の失業率は12%です）。また第一世代の高齢化が進み、高齢者の施設や介護も大きな課題となってきました。

クロイツベルグは壁に沿った周縁地帯から人気のある都心区に変わりましたので、家賃が高騰しはじめて、裕福な人が帰ってきました。



> NPO「Kotti」のコミュニティー・センター

このコミュニティー・センターの建物は元ユダヤ系企業の靴工場でした。ナチス時代に会社は収用されました。第二次世界戦争中、建物は爆弾で半壊しました。

1984年、インターカルチャーなアンブレラ組織の拠点になりました。5団体（ポーランド系青少年の非行防止団体、国際結婚したドイツ女性支援、子どもの学校での問題などを助け合うトルコ系親の会やこの地区の移民系60団体をまとめる団体など）がオフィスを構えています。

移民家族支援の相談、権利擁護、アドボカシーなどを行い、年間2万が利用しています。

この日も話を聞いている最中、向こうのテーブルでは第一世代の女性達がクッキーとトルコ茶で、おしゃべりを楽しんでいました。

ここは、いろいろな催しや、第一世代交流のカフェとして、若い画家デビューのギャラリーとしていつも賑やかです。

現在、移民というとトルコ系と言われますが、ベルリンではトルコ系は20万人です（それはベルリン住民の約6パーセントです）。アフリカ等から来た人も多く、中近東からの人たちを含め80のモスクを維持しています。ポーランドやロシア（東ドイツから移住したドイツ系ロシア人）、ベトナム（東ドイツ時代に移民としてきた）、最近増えてきた中国系など189カ国の移民が暮らしています。

臼澤さんと山口さんによると、東北でも似たような不安定な社会情勢を経験しているそうです。キーワードは仮設住宅の状況です。それで、彼らは意見の交換を続けるのを望んでいます。絆・ベルリンは間に立って連絡を保ちます。

最後に、近くにあるトルコのレストランで夕食を取りました。

1月28日 (火曜日)

朝のうち、私は臼澤さんと山口さんをヴァルター・モンパー氏に紹介する機会を持ちました。ヴァルター・モンパー氏は1989年から1990年まで西ベルリン市長と連邦参議院議長でした。東西ベルリン統合の後1990年から1991年までベルリン市長でした。



モンパーは東北の復興に興味を持っています。彼は成功を願っています。

* 10時に、「Kindervilla-Waldemar」を訪問しました。「Kindervilla」は多文化幼稚園だけでなく家族との出会いの場でもあります。正しい社名は「Interkulturelle Kindertages- und Familien-Begegnungsstätte Kindervilla Waldemar e.V.」です。そのKreuzbergにある幼稚園は模範的な厚生施設だと思います。大部分の子供はトルコ人とアラビア人です。

まず、ここの園長のŞen Akyolさんが施設を案内してくれました。Akyolさんは何年も前からベルリンに住んでいるクルド人です。トルコ・クルド間の懸案事項について、専門的に関わっています。Akyolさんは幼稚園を1982年に開設しました。施設を見終わってから、AkyolさんとソーシャルワーカーのSaniye Açıkel、Susanne Stephanは2時間半にわたって、施設の成立史、目標、方法などについての報告し、すべての問いに答えてくれました。

ドイツの幼稚園や小学校低学年は半日で終わります。それで、午後は多くの子どもはどこへいくともなく、町でブラブラしています。一部の子どもは親に本を読んでもらったり映画館に連れて行ってもらったりしたこともありませんでした。

Akyol さんは同僚たちと一緒に多文化教育のために全力を尽くして働きました。彼らは子どもたちを集め、居場所づくりをはじめました。



向かって右から2番目の人が Şen Akyol 園長です。

当時、ドイツに来たんだから、ドイツ語だけで保育も教育も充分と考えられました。また大規模な公的幼稚園で画一的な幼児教育が行われていました。こうしたマスプロ教育でした。多様な多文化教育がタブーであった時代です。行政は教育は教師がやるから親は文句を言うなという雰囲気でした。クロイツベルグでは移民仲間の父母と若い幼児教育の先生たちが協力して小規模なインテグレーション幼稚園を立ち上げ、それを行政に認めさせる運動がはじまりました。

基本理念は移民の子どもへのドイツ語と母語による就学前教育です。同時に、専門職による家庭支援をしています。その功績で、Akyol さんは大統領賞を受賞しました。

☆多言語教育

現在では移住家庭の子ども支援のため、ひとつのクラスにふたりの先生います。ドイツ語とクルド語かトルコ語の話せる先生がついています。



小学校への就学をスムーズにするため、ドイツ語による学習、継承言語による保育を結びつけています。

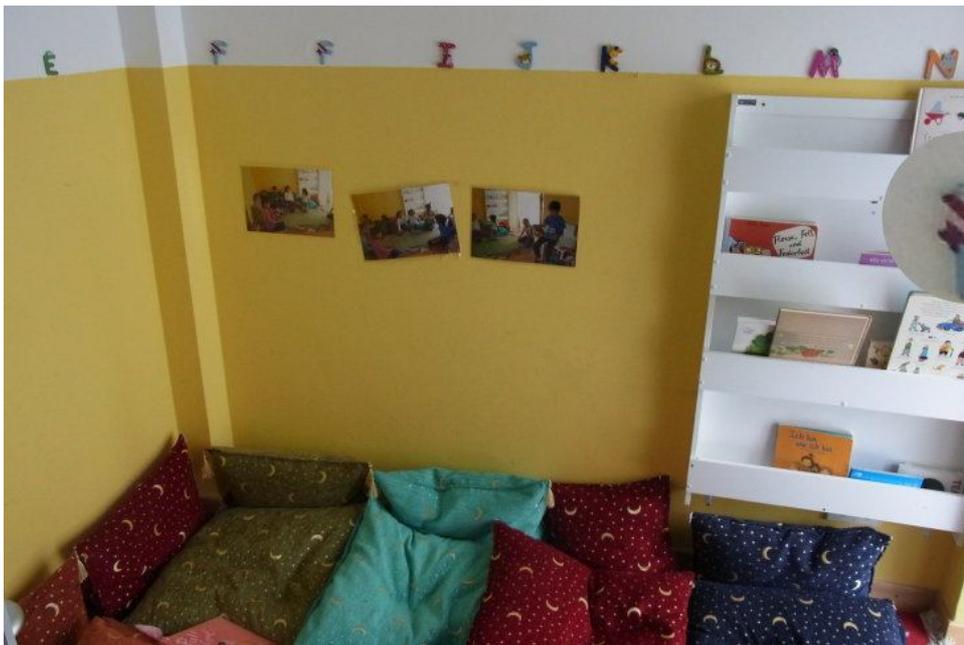
ドイツ連邦大統領から「手本になるコミットメント」として表彰されました。

専門職による移民の子ども家庭支援は重要なことです。言語能力の不足が統合の阻害原因です。トルコで育った女性が結婚のためにたくさんドイツへ呼び寄せられました。この女性たちはたどたどしいドイツ話しか話せません。大抵、母親や家族、友だちと離れてドイツで第一子を出産します。

子育てをはじめめる女性が孤立しないよう、仲間づくりと専門職による支援を行っています。

2階では、ソーシャルワーカーとトルコ系のセラピストが親の相談を常時受付けています。毎日、朝食の集まりをします。水泳教室や 個人面接、初心者向けのドイツ語コースもあります。

そして、子供たちが、4～5人ずつ集まると、落ち着いた雰囲気の中で希望する本を読んで聞かせています。



特に、「家族プロジェクト」という父母・コースが成功しています。幼稚園から小学校への移行に対処するための9ヶ月のコースです。子ども達にも母親たちにもペアグループ形成の支援をします。

臼澤さんと山口さんが「Kinderville」のソーシャルワーカーと仮設住宅の困難な状況についてオープンに話し合いました。たくさんの人が失業しています。失業者は毎日の生活に失望しています。狭い場所で家庭内暴力が増えています。そして、孤立も大問題です。心のケアがますます必要になっています。

仮設住宅に住んでいる人々の悩みは孤立した移住者の悩みと似ているので、意見の交換を続けることにしました。後日現地訪問も考えられています。たとえば、「Kinderville」のソーシャルワーカーが大槌へ行くこともできると思います。

「Kindervilla」訪問後、もう一度クロイツベルクを散策しました。



ほかにもいろいろ行きましたが、シュプレー川沿いのにぎやかなトルコ市場を見に行きました。ベルリンにいながらトルコに行ったような錯覚をしそうな場所です。東洋風の商品も多いです。

そして、Bergmannstrasseの墓地にも行きました。そこには、1825年から今までのクロイツベルク住民がたくさん葬られています。



最後はホットワインを雰囲気の良い店で傾けながら、話をしました。

1月29日（水曜日）

午前、私たちはお客様を空港まで送りました。彼らはヘルシンキを経て東京へ帰りました。



フランク・ブローゼ
ベルリン、2月26日